

## パライバ川中流サルガド・デ・サン・ブエリックス 郡における土地所有と農業経営

著者	斎藤 功, 矢ヶ崎 典隆, パゼラ エドワルド, マーラー キース
雑誌名	筑波大学人文地理学研究
巻	10
ページ	77-106
発行年	1986-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00146651">http://hdl.handle.net/2241/00146651</a>

# パラIBA川中流サルガド・デ・サン・フェリックス郡 における土地所有と農業経営

斎 藤 功・矢ヶ崎 典 隆

エドワルド・パゼラ・キース・マーラー

- |                            |  |
|----------------------------|--|
| I はじめに                     | III Salgado de São Félix における農業生産と農業地域区分 |
| I-1 従来の研究と本研究の目的           | III-1 最近における農業生産の動向                      |
| I-2 調査地域の概観                | III-2 生態的農業地域区分                          |
| II 入植過程と土地の再分割             | IV カント・アレグレの土地所有と農業経営                    |
| II-1 セズマリアと入植過程            | IV-1 農作物と土地利用図                           |
| II-2 近年における土地の再分割          | IV-2 土地所有と農業経営                           |
| II-3 農業協同組合 COOAGRAL と農民階層 | V むすび                                    |

## I は じ め に

### I-1 従来の研究と本研究の目的

私達は、文部省の海外学術調査「ブラジル北東部における土地利用の変遷と生態系の変化」の一員として、1984年7～9月滞伯し、ブラジル北東部の一農村を調査する機会をえた。この調査は農産物の豊富な雨（冬）季に実施されたこと、および一ヶ所に比較的長く滞在することができたという点で、東京教育大学の時代から実施された4回の調査<sup>1)</sup>とは大きく異なる。

ブラジル北東部は、その開発の古さ故に世襲的な大土地所有制など古い体質が温存されてきた後進的農業地域であるといわれてきた。一般に、ブラジル北東部は雨の多い海岸部の熱帯季節林帯 (Zona da Mata) と内陸部の雨の少ない半乾燥地帯 (Sertão), および両者の漸移地帯 (Agreste) に区分される。これら生態的に区分される3地帯は、開発の程度と歴史、農業方式そのものの差等を構造的に反映したものといわれている<sup>2)</sup>。我々の調査拠点はパラIBA州カンピナ・グランデ (Compina Grande) に置かれたので、まず調査の対象地域をこの中間地帯のアグレステ (Agreste) にしぼった。また、土地利用調査には大縮尺の地図が不可欠であるので、2万5千分の1地形図の発行されている地域が便利である。このような条件を満たす地域としてパラIBA川中流域のサルガド・デ・サン・フェリックス (Salgado de São Félix) 郡を調査対象地域とした。Salgado de São Félix (以下、S. S. Félix) は、後述のように開発の歴史も古く、アベロイスの生垣で区画された短冊状の地割が発達していることからみてもアグレステの典型といえよう。

ここでアグレステに関する従来の研究をみよう。ブラジル北東部研究の第1人者であるアンドラーデ (Manuel Correia de Andrade) は、アグレステがゾナ・ダ・マタ (Zona da Mata) とセルトン (Sertão) の漸移地帯であり、小農と混合農業によって特徴づけられると規定している<sup>3)</sup>。Webb, K. E. もほぼこの考え方を踏襲したものとみることができる。一方、パラIBA州を精力的に調査したフ

ランスの熱帯地理学研究センターは、アグレステを牧場地帯と規定し、イタバイアナ (Itabaiana) 周辺の本調査地域も本質的に牧場地帯としている<sup>4)</sup>。しかし、同時にトウモロコシ、ササゲなどの食糧作物の重要性をも見落してはいない。他方、ブラジルの地理学者は、北東部に関して農業の専門化や地域分化<sup>5)</sup>などを統計処理して一般論を展開し、小地域の実証的研究を軽視する傾向がある。

これまで日本からのブラジル北東部学術調査団は、乾燥地域の中でも比較的湿潤なアグレステの農業に関心を払った。つまり、ボルボレマ山地 (Serra de Borborema) の地方中心都市であるカンピナ・グランデやカルアルー (Caruaru) 周辺のプレジヨス (Brejos) での農業に重点をおいて調査を行ってきた<sup>6)</sup>。また、カンピナ・グランデ東部のアグレステを集約的牧畜地域<sup>7)</sup>としているものの、農場段階での詳細な事例研究に欠けるきらいがある。

以上のように従来の研究をみると、アグレステが牧場地帯かつ食糧生産地帯であることでは意見の一致をみるが、個別の事例研究が少いように思われる。そこで我々は研究の目的を具体的事例を重ねて「土地利用と土地所有」の実態を解明することに絞った。このことは、S. S. Félix への入植過程と土地の再分割を検討し、農場段階での土地利用と農業経営の実態を解明することでもある。

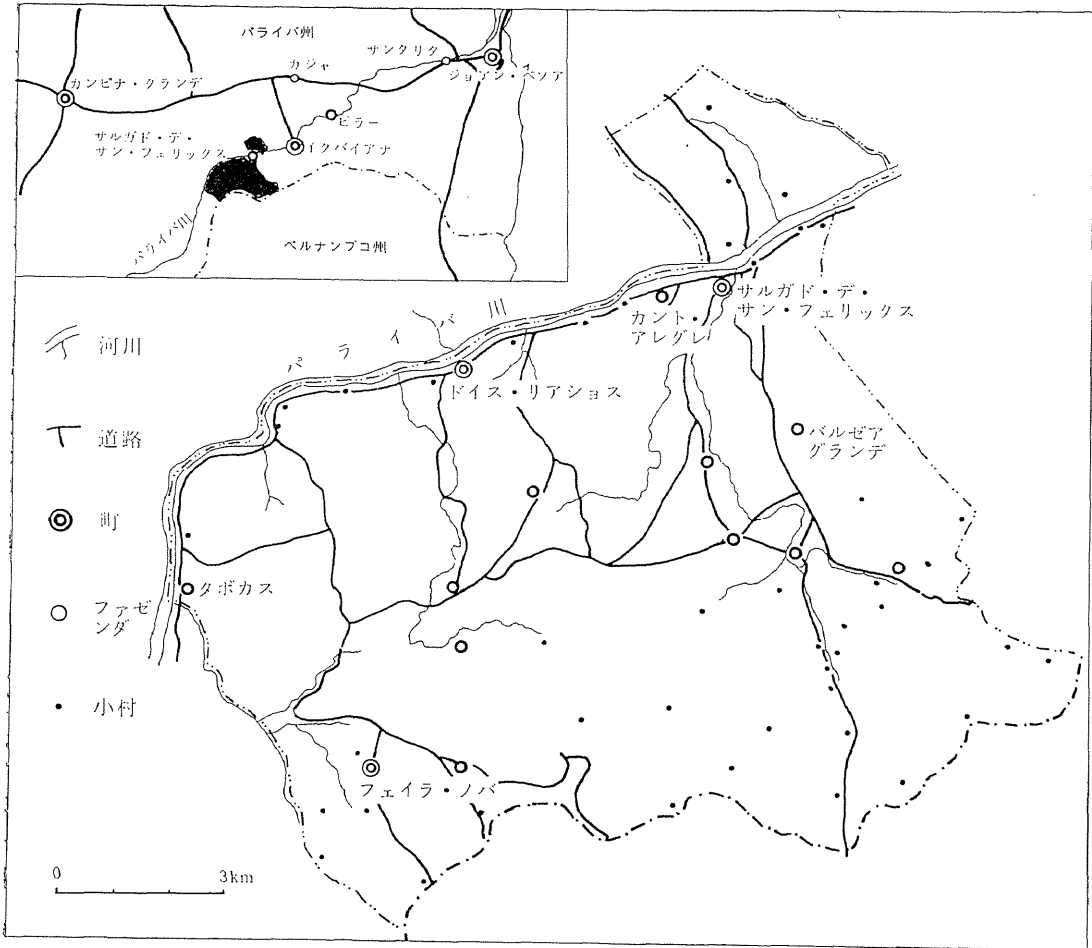
なお、S. S. Félix 郡の現地調査は、1984年7月28日から8月15日まで実施した。斎藤、矢ヶ崎の調査項目の打合せにそってエンドワルド・パゼラは調査の前半を、キース・マーラーは後半を協力した。斎藤、矢ヶ崎は9月1日の補足調査を含め、全日程を消化した。

## I-2 調査地域の概観

S. S. Félix 郡は、初期の探険家たちが「Rio Paraíba de São Domingos」とよんだパラIBA川の中流に位置する。パラIBA川はパラIBA州中南部のモンテイロ (Monteiro) 郡、ジャビタカ山地 (Serra Jabitacá) に源を発し、東西方向350キロメートルの長さを持つが、S. S. Félix 郡域においては、上流ボドコンゴ (Bodocongó) ほど急流ではなく、下流のサンタ・リタ (Santa Rita) ほどは沖積地が広くなく、西南西から東北東にゆるやかな流れとなる。また、郡の中心地 Salgado de São Félix は、「パラIBA川の宝石」とよばれる美しい地方都市イタバイアナの西方11km、自動車で約10分の距離にある。そこは、南緯7°21′、西経35°26′の地理的位置にあたる (第1図)。S. S. Félix の郡域は主にパラIBA川の右岸にある南部に広がるが、左岸の一部を含む。郡の東部はパラIBA州のイタバイアナ市、北部はモジェイロ (Mogéiro) 郡、西部はイタツバ (Itatuba) 郡とナツバ (Natuba) 郡に接する。一方、南部はマヌエル・デ・マトス山地 (Serra Mannel de Matos) で、ペルナンブコ州のチンパウバ (Timbaúba) 郡、マカパラナ (Macaparana) 郡と接している。

本地域の南部には海拔500m前後の山地があるが、大部分は100m前後の波状平坦地が広がり、牧場に利用されている。アグレステの中でも本地域は低位地帯 (Depression Zone) にあたる。低位地帯とは、地形の一般傾斜が海岸部のタブレイロス (台地) 面の一般傾斜より低いのであって、海拔高度そのものが低いことを意味しない<sup>8)</sup>。

一方、S. S. Félix の年平均気温は26°C、年降水量は700mmといわれているが、気象資料はない。したがって、S. S. Félix をとりまくインガ (Ingá)、モジェイロ、イタバイアナおよびペルナンブコ



第1図 研究対象地域

州のチンバウバの気象資料によって本地域の気候を類推しよう。第1表によると、本地域の雨季は3～7月の5ヶ月間で、8～2月の7ヶ月間が乾季であることがわかる。また、ペルナンブコ州のチンバウバが1,000mmを超える年降水量があるのに対し、イタバイアナで700mm, モジェイロ 800mm, インガ600mmであるのは、パライバ・ペルナンブコ州境のマヌエル・デ・マトス山地が、南東の季節風を防ぐ天気界となり、パライバ州側が雨かげ (rain shadow) となり、降水量が少ないことを意味するものであろう。このことは、土地利用上、チンバウバがサトウキビ地帯であるのに対し、パライ

第1表 調査地域付近の月別平均降水量

観測地点	年数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
インガ	67	35.2	44.8	74.5	88.6	94.7	104.8	98.4	61.3	23.5	11.7	13.1	22.7	653.7
モジェイロ	8	47.1	36.9	94.2	143.3	109.3	132.3	122.7	66.2	41.6	18.4	8.2	31.4	852.0
イタバイアナ	67	41.4	61.3	104.9	117.0	117.3	115.2	94.8	50.3	27.1	11.9	12.7	22.0	777.4
チンバウバ	66	50.2	73.8	121.0	137.5	156.4	153.7	124.7	70.3	41.5	21.9	24.5	38.7	1,014.1

(SUDENE の資料による)

バ州のカジャ、イタバイアナ以西が牧場地帯になっていることに対応するものであろう。われわれもペルナンブコのゴイアナ (Goiana), アリアンサ (Aliança), チンバウバが雨であるのに、イタバイアナで曇, S. S. Félix で晴れという経験をもった。また, 南部の山地でジャックフルーツの木が卓越風によりペルナンブコ州側から北西へ偏倚しているのを観察することができた。

S. S. Félix は, 以上のように雨かけ地帯であるので南部の山地を除き草原状およびサバナ状の牧場が卓越している。Webb がアグレステの特徴はアベロイス (aveloz: *Euphorbia heterodoxa*) の生垣にあると指摘しているように<sup>9)</sup>, 本地域の耕地界や牧区界にはアベロイスがふんだんに植えられている (写真1)。



写真1 アグレステを特徴づける  
アベロイスの耕地界・牧  
区界生垣

パライバ川の手前は牧草エレフ  
アント・グラス。アベロイスの生  
垣は, パライバ川からほぼ直角に  
半レグア (約3 km) 続いている。

1980年のセンサスによれば, S. S. Félix の人口は, 12,685人で, そのうち2,570人が55ヘクタールを占める都市部に, 10,115人が17,845ヘクタールを占める農村部に居住している。S. S. Félix の都市部には教会, 郡役所, 中学校, 図書館, 登記所 (Cartório), 農業改良普及所 (EMATER), チーズ工場, 屠殺場等があるが, 商店は少ない。住民の多くは, 日用雑貨品を S. S. Félix やイタバイアナで週一度開催される定期露天市場 (feira) で調達するものと思われる。バスは走っているが, 農民の乗物は馬・ロバが主体であり, 徒歩の人も多くみられた。全体的にみると, S. S. Félix はアグレステの典型的な農村といえよう。

## II 入植過程と土地の再分割

### II-1 セズマリアと入植過程

ノルデステにおける土地分割と植民の歴史は, 16世紀前半にカピタニア (Capitanias) が設けられたことに始まる。1534年から1536年にかけて, ジョアン三世は, 1494年のトルデシリャス条約で定められたポルトガル植民地を, 大西洋岸から東西に平行する境界線をもつ15のカピタニアに分割した<sup>10)</sup>。当初, 内陸地域は未知の世界であり, スペイン植民地との境界も不明確であり, しかも内陸部への植民をポルトガル王が制限していたこともあり, 16世紀を通じて植民・定住は海岸部に限られていた。

今日のパライバ州全域を含む地域には、1534年9月にイタマラカのカピタニア (Capitania Hereditária de Itamaracá) が設けられた。これは、南はイガラス (Igaracú) から北はバイア・ダ・トライソン (Baía da Traição) 付近までの海岸部を間口とし、内陸部へと広がるカピタニアであった。南に隣接するペルナンブコ・カピタニアとは対照的に、イタマラカの開発は遅々として進まなかった。カピタニアの防衛ならびに植民の責務を負うドナタリオであるソウザ (Pedro Lopes de Sousa) は、イタマラカと同時にブラジル南部にサンタ・アマロ (Santa Amaro) とサンタナ (Sant' Ana) の2つのカピタニアを獲得しており、イタマラカの地を訪れることはなかった。このカピタニアが存続しえたのは、南端部にイガラスの集落およびイタマラカ島に城砦があり、しかも、貴重な赤色染料原料として当時の植民地経済の中心をなしていた紅木 (ブラジルの木: pau brasil) が豊富に存在したためであった。このような状況のもとで、ポルトガル王セバスチャン (D. Sebastião) は、1574年に、カピタニアの征服・開発が進まなかったことを理由に、イタマラカ・カピタニアの大部分を吸収するパライバ・カピタニア (Capitania Real da Paraíba) を設置した<sup>11)</sup>。

ブラジルの木について大西洋海岸部にはサトウキビ経済が発達していったが、内陸地域の植民を促進したのは、セズマリア (Sesmaria) と呼ばれる相続可能な土地の分割賦与システムであった<sup>12), 13)</sup>。

海岸部からアグレステへの進出はオランダの占領時代に進展したものであったが<sup>14)</sup>、パライバ・カピタニアにおける最初のセズマリアは、1586年1月に賦与されたものである<sup>15)</sup>。しかし、パライバ川中流のイタバイアナ=S. S. Félix 地域では、バルカセル (Francisco Canelo Valcasser) とパロス (Francisco do Rego Barros) に対してマラカイペ (Maracaípe) の土地が1663年8月セズマリアとして賦与されている。これはパライバ川ぞいにマラカイペ川との合流点にいたる無主地で、4平方レグア (1レグアは約6km) の面積をもっていた<sup>16)</sup>。また伝導師たちによる定着も早く、ペルナンブコ内陸部からやってきてファグンデス (Fagundes) に集落をつくったイエズス会師たちは、カリリ・インディオを伴ってボルボレマ台地をおり、1670年には、今日のピラー (Pilar) のあるパライバ川沿いの土地に教化集落 (aldeia) をつくった<sup>17)</sup>。このように、17世紀にはパライバ川中流域にヨーロッパ人による植民が始まっていたが、その人口は希薄であった。

前述のように、海岸部では入植当初からサトウキビ経済が発達していたが、16世紀にはこのサトウ産業は牧畜業と補完関係にあった。家畜はサトウキビ産業に食料、皮革、畜力を提供する一方、サトウキビ畑に刈跡放牧された。しかし、サトウキビ栽培地域が西方へ拡大するにつれ、牧畜経済との対立がしだいに増大し、牧畜地帯は内陸部へと移動せざるをえなくなった。一方、エンジェーニョとよばれる製糖所の所有者はアグレステにファゼンダをもち、両地域間には季節的な家畜の移動がみられた<sup>18)</sup>。17世紀にパライバ川沿いのアグレステに牧畜地域が形成されていたことは、文部省によるブラジル歴史地理地図帳によっても明らかである<sup>19)</sup>。1701年には勅令 (carta régia) により、海岸から10レグア (約60km) 以内の地域で牧畜が禁止されたが、この10レグア線は、ほぼイタバイアナを南北に通るものであった。こうした背景のもとで、18世紀に入って、パライバ川中流域に新しいセズマリアが次々と賦与され、これらが牧畜ファゼンダとして発展していった。

タバレス (Tavares) は、パライバ・カピタニア内で1824年までに分割賦与されたセズマリア 1,138

件を記載しているが、今日のイタバイアナ市周辺に存在したセズマリアとして、マイア (Maia) は17件をあげている。これらは、1726年から1807年までに賦与されたものであったという<sup>20)</sup>。タバレスの本にみられる不明確なことの多い記述から各セズマリアの位置を確認して今日の地図上に印すことは容易ではない。しかし、今日の S. S. Félix 郡東部には、少なくとも4つのセズマリアが存在したと考えられる。マラカイペ・セズマリアに次いで古く、1726年3月にパスコンセロス (Capitão Caetano Leitão de Vasconcellos) に対して賦与されたセズマリアは、パライバ川にそって長さ3レグア、幅は川の両側に0.5レグアずつ、すなわち3平方レグアの面積をもつ典型的なセズマリアであった<sup>21)</sup>。北流してパライバ川に注ぐサルガド川 (Riacho Salgado) ぞいには、ピラーの住人クーニャ (Capitão Estevão José da Cunha) が、面積は明らかではないけれども、1806年9月にセズマリアを得ている<sup>22)</sup>。この土地の北東には、今日のイタバイアナの西でパライバ川に注ぐカンポ・グランデ川 (Riacho Campo Grande) まで、3平方レグアのセズマリア (1795年11月賦与) があった<sup>23)</sup>。このほかにも、マリア・デ・メロ (Maria de Mello)、アルーデ・カマラ (Francisco de Arrude Camara) のセズマリアがあり、パライバ川の北には、マタ (João da Mata) とコンセイソン (D. Romualda Maria da Conceição) が賦与された3平方レグアのセズマリアがあったと考えてよいであろう<sup>24)</sup>。このようにパライバ川流域のアグレステにおけるセズマリアは長さ3レグア、幅1レグアの3平方レグアのものが典型的であった。

19世紀初頭までには、イタバイアナ=S. S. Félix 地域の土地はセズマリアに分割・賦与され、あるいは各セズマリアの再分割が進んだと考えられよう。こうした土地の分割と牧畜経済の発達により、イタバイアナは、18世紀末期までにはパライバ川中流域アグレステの中心集落として、シチオ (sítio) からポボエド (povoado) へと成長していた<sup>25)</sup>。

19世紀に入っても牧畜が経済の中心であったが、その中ごろからは、農業的要素が徐々に重要性を高めていたと考えられる。これは、1845年にピラー郡議会 (Câmara Municipal do Pilar) の提案によりプロビンシア (Província) より発布された決議3号によって、当時のピラー郡の全域 (今日のイタバイアナ、S. S. Félix 両郡の地域を含む) において、家畜の放牧飼育が禁止されたことにより察せられる。ただ、パライバ川に沿って当時のカバセイラス郡との境界までは、片側1レグアの土地での放牧がこの例外として認められていた。1848年にはイタバイアナ地区 (Sub-Delegacia de Itabaiana) の全域において自由放牧が許可されているが、1864年には再びピラー郡全域において、牛、馬、羊、山羊、豚の放牧が禁止された。ただし、イタバイアナの集落の周囲0.5レグアの円内で、馬のみの放牧が許された (法令 Lei 157号)。1871年の法令 (Lei 429号) では、イタバイアナの集落からサルガド (今日の S. S. Félix 集落) にいたる、パライバ川にそって片側0.5レグア、すなわち幅1レグアの土地で、家畜の飼育が認可されている<sup>26)</sup>。サトウキビ栽培はパライバ川に沿ってピラーまでは達しており<sup>27)</sup>、それより西の地域は基本的には牧畜経済であったとはいえ、牧畜が牧柵のないオープン・レンジであった当時においては、農業と牧畜との対立が存在していたとみることができる。こうした状況は、19世紀末に有刺鉄線が導入され、牧場が囲い込まれた結果、放牧地の景観に著しい変化が生ずるまで続いた<sup>28)</sup>。

牧畜地帯の東端部に位置するイタバイアナの集落の重要性は、19世紀後半に牛市場(feira de gado)が設けられたことにより、いっそう増大した。牛市場は、歴史的にみると、サトウキビ地帯の拡大に伴って、イガラスからゴイアナ(Goiana)へ、さらにペドラス・デ・フォゴ(Pedras de Fogo)へというように西方への立地移動をみるが<sup>29)</sup>、1864年の法令(Lei 140号)により、イタバイアナの西5キロのグアリタ(Guarita)からイタバイアナへと移された。これは一時再びグアリタへ、そしてカンピナ・グランデ(Campina Grande)へと移されたが、1879年より、カンピナ・グランデとイタバイアナに公設牛市場が並存するようになった<sup>30)</sup>。

牛市場の町として、イタバイアナは急速な発展をとげた。1890年にはピラー郡からイタバイアナ郡が独立したが、このイタバイアナ郡には、今日の S. S. Félix 郡とモジェイロ郡が含まれていた<sup>31)</sup>。イタバイアナの集落は、1881年にポボアドからヴィラ(vila)へ、さらに10年後にはシダーデ(cidade)へと昇格した<sup>32)</sup>。今世紀に入って1907年までには、ジョアン・ペソア(João Pessoa)、レシフェ(Recife)、さらにカンピナ・グランデとは鉄道で結ばれており、これはこの地域の発展にとって大きな刺激となっていた。1910年代までには、イタバイアナ市はパラIBA州内陸部では最も発展した都市となっており、鉄道馬車が走り、電気が通じ、道路は舗装され、水道が敷設され、並木と公園の整備が進んでいた。毎週月曜日に開かれる牛市は、大きなにぎわいをみせていたという<sup>33)</sup>。

また、イタバイアナから S. S. Félix にいたる地域にもかなりの人々が住んでいたようである。1890年代初頭に出版されたジョフィリー(Irenêo Joffily)の著作をみると、サルガドもまた大集落であり、イタバイアナからサルガド、そしてドイス・リアシヨスにいたるパラIBA川ぞいの地域は、カーチンガではあるが人口密度は高く、4,000世帯が数えられたと記されている<sup>34)</sup>。

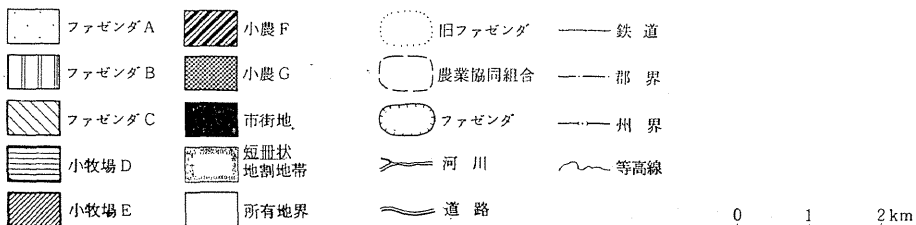
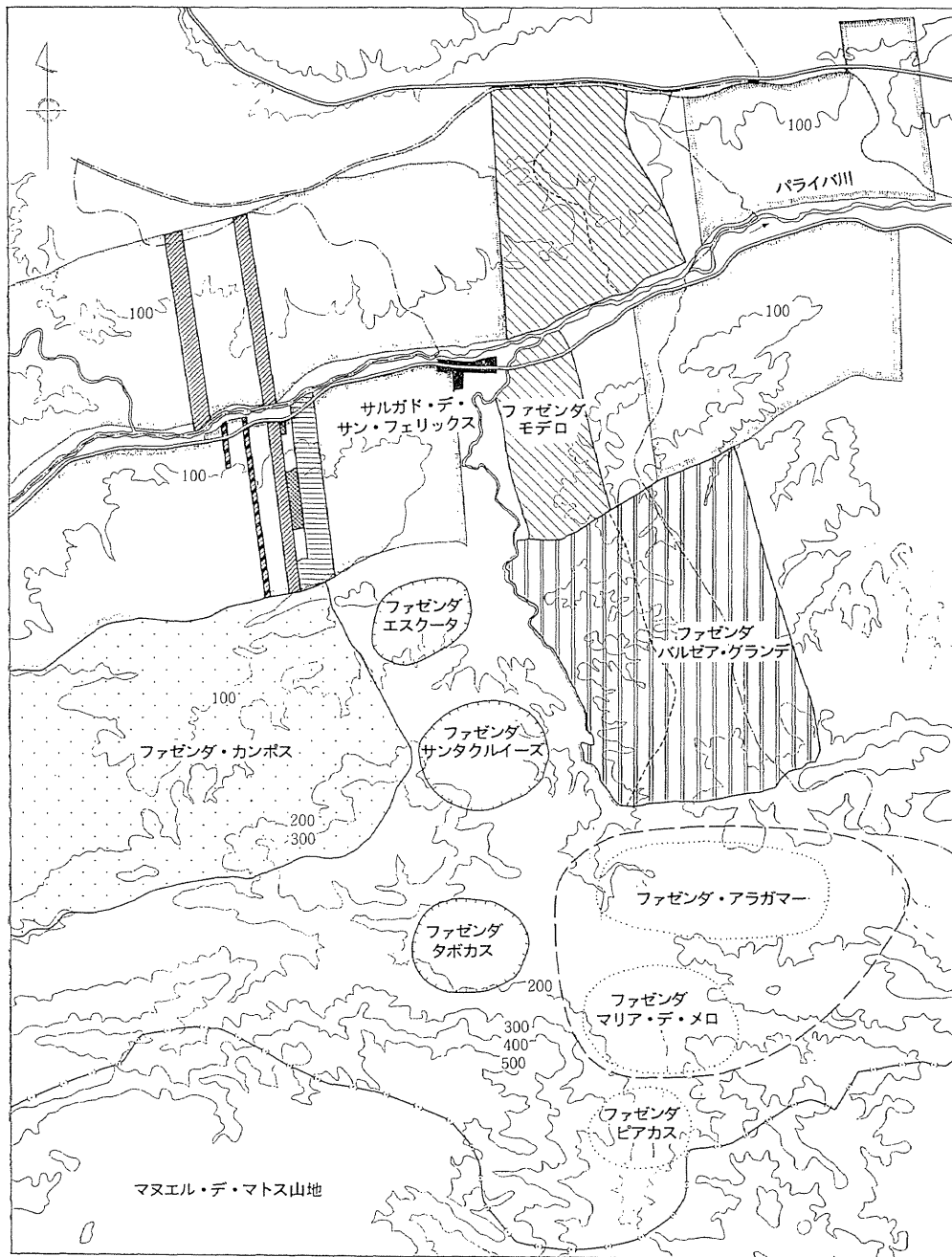
われわれの研究対象地域である S. S. Félix 郡東部は、このようにイタバイアナと密接な関連をもって発展してきた。S. S. Félix 郡が独立する1962年2月までは、モジェイロ郡とともにイタバイアナ郡に属していた。S. S. Félix 地区はサルガド(Salgado)とよばれ、また1940年代には一時アブラ(Aburá)ともよばれたが、その後 S. S. Félix の名称が用いられるようになった<sup>35)</sup>。

## II-2 近年における土地の再分割

19世紀後半から今世紀初頭にかけて、今日の S. S. Félix 郡地域にはひとりの大地主が存在し、このことが、1887年の大旱魃と強盗の頻発に加えて、S. S. Félix 地域の発展に大きな障害となったという<sup>36)</sup>。

S. S. Félix 地域における大ファゼンダの分割とそれに伴う諸相は、マロージャ・ファゼンダの分割の歴史によくあらわれている(第2図)。エンジェーニョ・コンセイソン(Engenho Conceição)からこの地にやってきたオディロン・マロージャ(Dr. Odilon Maroja Ribeiro Coutinho)は、当時の大地主であり、1890年のイタバイアナ郡の発足と同時に初代の郡長(prefeito)となったルイス・デ・アラウジョ(Coronel José Luis de Araujo)から、その土地の一部と邸宅を800,000レイスで購入した<sup>37)</sup>。オディロン・マロージャはこの地方の有力な政治家のひとりとなり、1915年から4年間、第10期、5代目のイタバイアナ郡の郡長をつとめた人であった<sup>38)</sup>。





第2図 サルガド・デ・サン・フェリックスにおける土地所有

彼は標準的なセズマリア以上の面積である 4 平方レグアにほぼ相当する 14,000 ヘクタールの土地を所有していた。1950 年代後半に彼が死亡すると、この広大なファゼンダは 7 人の子供を含む 9 つのファゼンダに分割・相続された。子供が相続したのは、モデロ (Modelo)、バルゼア・グランデ (Varzea Grande)、マリア・デ・メロ (Maria de Melo)、ピアカス (Piacas)、カンボス (Campos)、リアシヨ・ドス・クハイス (Riacho dos Currais)、アラガマ (Alagamar) の各ファゼンダであり、他の 2 つはタブカス (Tabocas) とサンタ・クルイズ (Santa Cruz) であった。

アラガマを相続した長男のアナウド・マロージャ (Arnaldo Maroja) は、彼の兄弟たちからヴァルゼア・グランデ、マリア・デ・メロ、ピアカス、カンボス、リアシヨ・ドス・クハイスの土地を買い集め、再び広大なファゼンダをつくった。ところが生涯独身をとおしたアナウドには子供がなかったので、1967 年に彼が死去すると、遺言によりすべての土地が売却された。こうして広大な土地は新しい地主の手へと渡って行き、次節で述べるような、土地をめぐる社会闘争が地主 (ファゼンデイロ) と小作農 (モラドール) との間に生ずる原因となった。

オディロン・マロージャの分割によって生じたファゼンダのうちで、今日も彼の子孫によってひき続き所有されているのは、ファゼンダ・モデロである。イタバイアナから S. S. Félix への道路に沿って、サルガド川 (Riacho Salgado) の東方 200 メートルの地に、色あせたとはいえ堂々とした館が今でもパライバ川に臨んでたっている (写真 2)。このファゼンダは、パライバ川の両側に 0.5 レグアの奥行きをもち、総面積は 1,340 ヘクタールであった。1960 年の彼の死によって、川から南の 440 ヘクタールがその妻のマリア・マロージャ (Maria José Almeda Maroja) に相続され、一方川向うの土地は、6 人の子供に 150 ヘクタールずつ分割された (第 2 図の C)。子供の一人が他の二人の土地を購入したため、この土地は、第 2 図では境界は不明確であるが、今日 4 つの所有地に分割されていることになる。マリア・マロージャはファゼンダ・モデロ館近くの家に住むが、子供達はいずれもレシフェに住む教師や商店主やビジネスマンで、時々こうしたファゼンダを訪れるだけである。

一方、ファゼンダ・バルゼア・グランデ (第 2 図の B) は、1976 年末に現在の所有者であるジョアン・

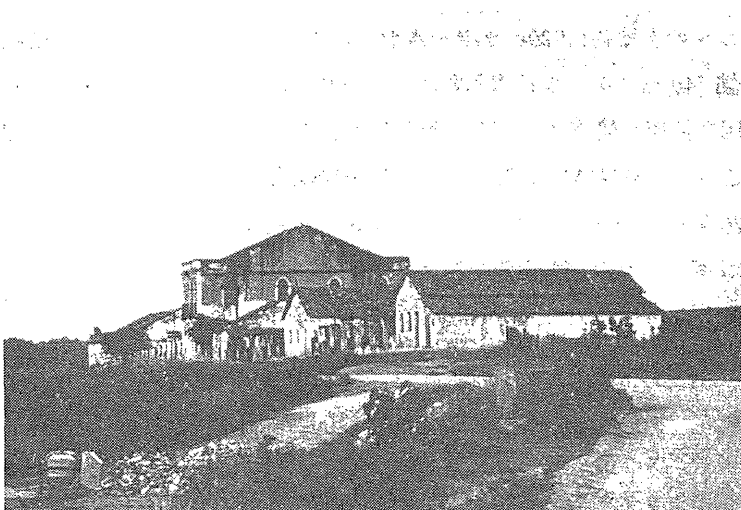


写真 1 ファゼンダ・モデロ (Faz. Modelo) の廃屋

かつて権盛を誇った大牧場主の居館跡が、今もパライバ川河畔にたっている。

ペソア在住の獣医の手に渡った。同氏はモジエイロ郡にもファゼンダ・ピラウア (Fazenda Pirauá) を所有しており、バルゼア・グランデの土地は、税金の関係から、870ヘクタールは彼の所有であるが、580ヘクタールは父の名義となっている。この1,450ヘクタールのファゼンダ・バルゼア・グランデには、1,500頭の肉牛（ゼブ系ネロール種）が飼育されている。牧草として300ヘクタールにはバッファロー・グラスが、50ヘクタールにはエレファント・グラスが栽培されている。この牧場には15～30家族のモラドールがいるため、牛の放牧とともにトウモロコシの栽培がみられた。

なお、現在 S. S. Félix 郡における最大のファゼンダは、ファゼンダ・カンポス（第2図のA）で、その面積は4,700ヘクタール余りにおよぶ。これをふくめて、4,000ヘクタール以上の面積をもつ2つのファゼンダは、全面積の実に45%を占有しているのである（第2表参照）。

### II-3 農業協同組合 COOAGRAL と農民階層

ファゼンダと小農の混在によって特徴づけられる S. S. Félix におけるもうひとつのタイプは、農業協同組合 COOAGRAL の存在である。前述のように、アナウド・マロージャの死によってその広大なファゼンダは分割・売却されたが、アラガマ、マリア・デ・メロ、カイポラ、ピアカスの地域では、一世紀近くにはわたってトウモロコシ、マニオク、豆類を中心とする、ファゼンダでのモラドールによる小農的自給農業が卓越してきた。旧地主による生産性の低い大土地所有制にかわって、8名の新地主はパンゴラ・グラス等の導入による牧場化やサトウキビ栽培化をはかった。プロテラ (PROTERRA) やプロアルコール (PROALCOOL) といった政府の財政的援助政策は、こうした傾向を促進した。新しいファゼンデイロはモラドールを労働者化するため土地からの追い立てを試みたため、1978年にモラドールとファゼンデイロたちの間に社会的緊張が生じ、400家族近くをもまきこんだ土地をめぐる農民闘争が発生した。武装したファゼンデイロ側によるモラドールの畑の破壊や、モラドールによるサトウキビ畑の破壊などがくり返された<sup>39)</sup>。

こうした社会問題は、政府の介入によってようやくおさまった。農民たちは約10,000ヘクタールの接收を要求したといわれるが<sup>40)</sup>、結局1978年11月8日の大統領法令 (decreto presidencial) 82,614号の署名により、ファゼンダ・アラガマの土地約1,920ヘクタールが収用された。闘争はその後も続き、2年後にはマリア・デ・メロの土地740ヘクタールが購入され、その総面積は2,660ヘクタールとなった<sup>41)</sup>。こうして1980年には、国立拓植・農業改革院 (INCRA) によってアラガマ・プロジェクト (Projeto Alagamar) が発足し、COOAGRAL と呼ばれる農業協同組合が誕生した。

COOAGRAL の事務所は、1880年代に建設されたといわれるカイポラ湖 (Açude Caipora) に近く、サルガド川に臨んだ旧ファゼンダ・アラガマの建物を利用している (写真3)。この地区内の人口は、1980年センサスでは約2,500を数え、われわれが訪れた時点で、410家族が2,800ヘクタールにおよぶ土地に分散して居住していた。この協同組合の中心的機能は、現在共同販売とインフラストラクチャーの整備となっている。

こうした小農民の主要作物は、トウモロコシ、豆類、マニオクである。綿は換金作物として重要であったが、1983年7月以来の病虫害により全滅の被害をこうむった。こうした作物に加えて、各農家



写真3 生れたばかりの協同組合 (COOAGRAL) と組合員  
ファゼンデイロ (農園主) とモラドール (小作農) の小作農民闘争 (アラガマ騒動) の後、1980年に協同組合 (COOAGRAL) が成立した。この建物は、かつてファゼンダ・アラガマの居宅であった。

は2～3頭の乳牛のほか、若干の山羊、豚、馬などの家畜を飼育するのが一般的である。また COOAGRAL 事務所の近くに、マニオクの製粉小屋であるカザ・デ・ファリーニャが一軒みられた。

このような自作農化、および前述の相続に際してモラドール (morador: 名子的小作農) の中に自作農化していったものもあり、全体として自作農化が進行した。S. S. Félix 郡における1984年の土地所有状況は第2表に示されている。それによると土地所有の分極化すなわちミニフンディオとラティフンディオとの対照は明らかである。5ヘクタール未満の戸数は、全土地所有者591人の56.4%を数えるが、面積では4.2%を占めるにすぎない。

とくに2ヘクタール未満の戸数は、全体の18.1%に達している。しかし、現在モラドールを牧場から追いだし、農業労働者とする傾向が続いているので、これら自作農の下には、多くの土地なき農村労働者が存在するのである。この土地なき農村労働者は S. S. Félix の町はずれや後述するカント・アレグレのアグロヴィラ (Agrovila: 農業労働者村) に住むようになった。というのは、アグロヴィラの家屋は景観上、小さく比較的新しいことがわかるからである。

第2表 サルガド・デ・サン・フェリックス郡  
における土地所有規模別割合

土地所有規模 (ha)	戸数 (%)	面積 (ha) (%)
0～ 1.9	107 (18.1)	114.0 (0.6)
2.0～ 4.9	226 (38.3)	686.8 (3.6)
5.0～ 9.9	124 (21.0)	822.6 (4.3)
10.0～ 24.9	67 (11.3)	987.0 (5.2)
25.0～ 44.9	19 (3.2)	625.1 (3.3)
50.0～ 99.9	21 (3.6)	1,414.5 (7.5)
100.0～ 199.9	14 (2.4)	1,655.6 (8.7)
200.0～ 499.9	9 (1.5)	2,767.9 (14.6)
500.0～ 999.9	2 (0.3)	1,340.6 (7.1)
1,000.0～3,999.9	0 (0.0)	0 (0.0)
4,000.0～4,999.9	2 (0.3)	8,564.7 (45.1)
Total	591 (100.0)	18,978.8 (100.0)

(資料は INCRA: Cadastro Rural do Município de Salgado de São Félix, 1984, (INCRA de João Pessoa) より集計)

### III Salgado de São Félix における農業生産と農業地域区分

#### III-1 最近における農業生産の動向

S. S. Félix 郡の農地は、統計上では、ほぼ半々の割合で耕地と放牧・牧草地として利用されている。1980年の農牧業センサスによれば、耕地は休耕地（507ヘクタール）を含めて、全農地面積の42%にあたる6,360ヘクタールであり、放牧・牧草地は39%（5,907ヘクタール）を占めていた。残りは林地と未利用地であった。

農業生産の中心は、伝統的に綿、豆類、トウモロコシである。1980年農牧業センサスによれば、綿作地は2,497ヘクタールをしめ、これは1983年の面積の2.3倍であった（第3表）。しかし、ブラジルの綿作地帯を南からおそった病害虫（*Authonomus grandis* Boheman）は1983年7月には当地にも

第3表 サルガド・デ・サン・フェリックス郡における農作物の作付面積（上段）と収穫量（下段）の推移

年度		1970	1975	1980
作物				
綿	花	1,118 (462)	1,126 (436)	2,470 ha (794)(トン)
トウモロコシ		1,028 (271)	2,088 (928)	1,712 ha (432)(トン)
豆	類	1,303 (328)	2,145 (870)	1,783 ha (328)(トン)
マニオク		259 (1,069)	394 (2,781)	139 ha (1,049)(トン)

(Censo Agropecuário, Paraíba, 各年度による)

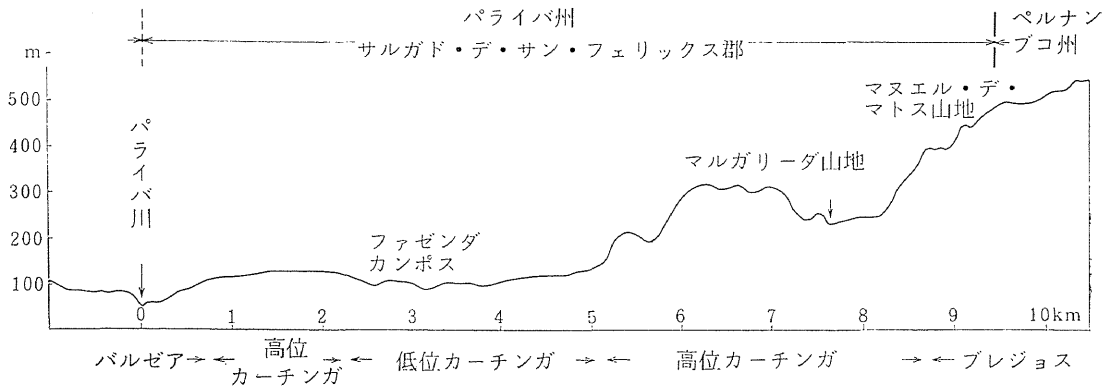
達し、綿は全滅の被害を受けた<sup>42)</sup>。これは開絮前の実の中に虫が入り、綿の繊維を食いちぎってしまうため、収穫ができなくなってしまうものである。豆類は1970年の1,303ヘクタールから1975年の2,145ヘクタールへと増加したが、1980年には1,783ヘクタールへと減少した。トウモロコシについても同様に、1970年から1975年までに倍増して2,088ヘクタールに達したが、1980年には1,712ヘクタールへと減少した。次章で詳述を試みるカン

ト・アレグレ (Canto Alegre) には、トウモロコシ製粉工場が一軒ある。ファリーニャの原料として重要なマニオクをみると、1970、1975、1980年の各面積は259、394、139ヘクタールであった。作物の栽培・収穫面積をみると、1980年が早魃年であったことを考慮しなければならない。半乾燥地域であるアグレステにおける作物栽培は、セルトンほどではないにしても年々の降水量の影響を強く受ける。熱帯の半乾燥地域における降雨に対する信頼性のなさは、収穫量の変動にも反映される。また、1980年にはバナナ、オレンジがそれぞれ94ヘクタール、8ヘクタール栽培されているが、これは郡南部のブレジョス地帯に分布する。

一方牧畜についてみると、1980年センサスでは牛は8,339頭を数え、そのうち肉用が6,861頭、乳牛が1,244頭であった。これに加えて、山羊、羊、豚も若干飼育されていた。

#### III-2 生態的農業地域区分

S. S. Félix の農業は、地形と水利用の観点から大きく3つの生態的農業地域に区分される。第3図に示したように南北の断面をみると、S. S. Félix は、海拔50メートルのパライバ川河床から南部のマヌエル・デ・マトス山地の542メートルまで、いくつかの面に区分される。すなわち、パライバ川に面した斜面で、灌漑可能なバルゼア (Várzea)、海拔400メートル以上で南東貿易風の影響を受け湿潤な



第3図 サルガド・デ・サン・フェリックス郡の南北地形断面

ブレジョス (Brejos), および両者の中間にあり, 海拔 100~120m 面が広がるカーチンガ(Caatinga)である。以下にそれぞれの特色についてのべてみよう。

#### (1) バルゼア

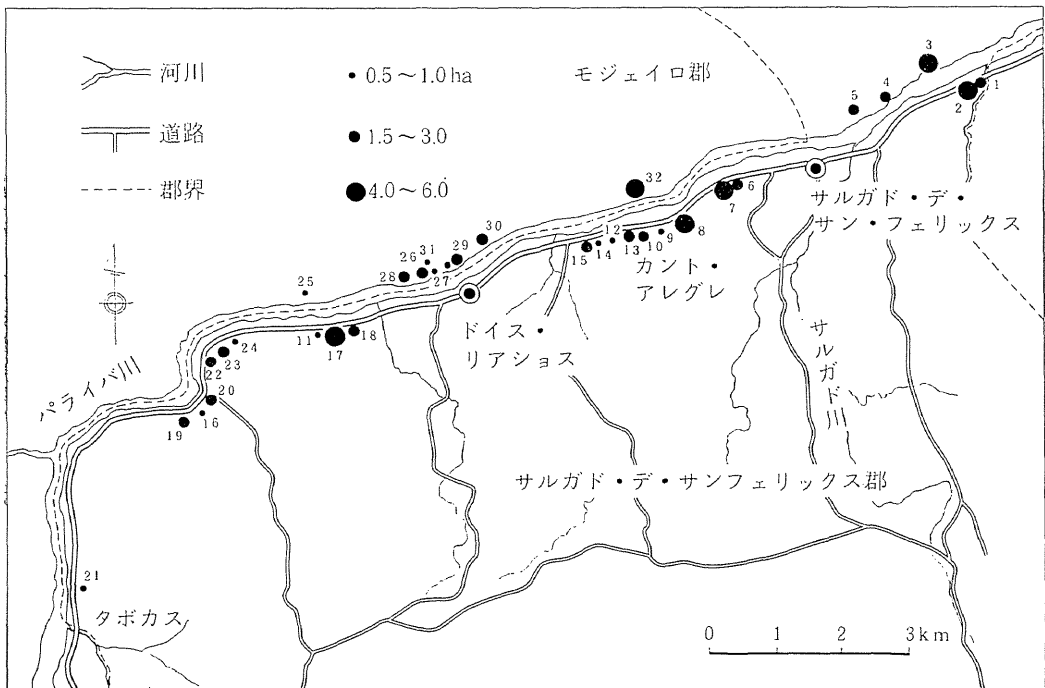
パライバ川の水量はかつて大きく変化した。雨期の増水時には河岸の道路まで6~7メートル上り, 床下浸水することもあった。下流のサトウキビ地帯では, 洪水によりサトウキビが全滅することがあったという。今世紀に入って, 大洪水は1914, 1917, 1924, 1947, 1974, 1977年に記録されている<sup>43)</sup>。一方, 乾季には水流が枯れるほどであった。近年では, 上流にボケロン (Boqueirão) ダムが設置されたため, 乾季雨季の水位変化はそれほど小さくなった。われわれの訪れた7月下旬~8月上旬には, 自転車をかついでパライバ川を渡る人々の光景がみられた。乾季には自動車も横断可能となり, イタパイアナの橋を渡らずに, モジェイローインガーカンピナ・グランデに行くことができる。

バルゼアにおける農業の最大の特徴は, 灌漑農業の存在である。パライバ川の水量が比較的安定していることは灌漑農業には都合がよく, その水はエレファント・グラス, トマト, ピーマン, キャベツの栽培に活用されている。第4図は, 1982年にパライバ川の水をポンプアップして灌漑した地点を示したものである。S. S. Félix 郡に24か所, モジェイロ郡に8か所の合計32か所である。当然のことながら, その分布はバルゼアと一致する。各地点の灌漑面積は, 第4表に示したように, 0.5ヘクタールから6.0ヘクタールまで様々であるが, 平均2.3ヘクタールであった。灌漑方法は自然流下式の重力 (gravity) 法が圧倒的であるが, スプリンクラーを使用しているのも2か所みられる。また一つの灌漑面積が大きくなれば生産性もあがることが認められる。

われわれはこれらの灌漑地区のうちで, アフリカから導入した牧草エレファント・グラスをスプリンクラーで灌漑している農場と, 上流のタバカス (Tabocas) 地区でトマトとピーマンを栽培している農場をみることができた。タバカス地区では, 海拔 110メートルのパライバ河畔のポンプ小屋から138メートルの耕地の最上部まで, パライバ川の水が電気揚水ポンプで揚水されていた。なお, 停電に備え, ブラジル・クボタ製のジーゼル・ポンプも設置されており, 1982年の時点 (第4表) より進歩しているように思われた。なお, 138メートルの地点はほぼバルゼアの頂稜部に位置し, 灌漑水はそこから導水路により四方八方へと流下して畑地への灌漑がなされる。灌漑用水量の調節は, 1人の

写真4-1 パライバ川バルゼアにおけるトマト畑の灌漑  
景観

パライバ川から電気揚水された水は、自然流下式の重力法（S字型）で、定植後のトマト畑に1日2回、給水される。



第4図 パライバ川バルゼアにおける灌漑畑の分布

男子がエンシャーダ（畦かき）とシバンカ（つるはし付唐鍬）を用いてなされる。1つの区画は斜面の傾斜度によって異なるが、等高線状に7～8メートルの畦が畦間65～70センチで10～20段からなり、灌漑水はS字状に流下するように造成されている。この1区画に水がまわると、導水路からの水口を閉じ、水を順次次の圃場に移す。

われわれが訪れた8月初旬には、トマトが3ヘクタール定植されたばかりの状況であり、トマトより下の畑にピーマンが2ヘクタール定植される予定であった。なお、トマトやピーマンの苗は頂稜部の水槽付近で栽培されていた。灌漑は定植後2か月間は午前（5～11時）と午後（2～5時）の2回



写真 4-2 収穫中のトマト

トマト、ピーマンなどの野菜栽培は借地農によって行われる。この圃場は、写真 4-1 と同一人の経営である。収穫物はジョアン・ペソアの公設市場 (SEASA) に出荷される。

行うという (写真 4-1)。

このトマトの圃場は定植直後のものであったが、近くの別の圃場では、収穫中のトマト (写真 4-2)、マルメレイロの支柱をとり払っているトマトもあった。トマトの品種は、ノバクルズ、サンタ・ジェルトゥデス、パウリストニヤの 3 種である。一般にトマトの値段は 11 月から 4 月までの乾季によいので、この農場では 12 月から 1 月に収穫最盛期がむかえられるよう、8 月に定植する。この夏どりトマトに加え、S. S. Félix 郡には 2 月定植のトマト畑 7 ヘクタール、7～8 月初旬定植の畑 11 ヘクタールがあり、前者ではヘクタール当り 40 トン、後者では 38 トンの収穫があるという。ちなみに、トマトはピーマンのように青いうちに収穫してしまう。収穫されたトマトは、パライバ州の州都ジョアン・ペソアの公設市場 (CEASA) に出荷される。

これらの灌漑農業は主として借地農によって行われる。タボカスの農場では、バルゼアに 10 ヘクタールを借地し、夏ど

第 4 表 パライバ川河畔地における灌漑面積

灌漑地点*	灌漑面積	1 ha 当りの生産性	灌 漑 方 法	動 力
1	1.5 ha	60 トン	自然流下式	ジーゼル
2	4.5	120	スプリンクラー	電気揚水
3	6.0	30	自然流下式	ジーゼル
4	3.0	35	"	"
5	3.0	48	"	"
6	2.0	32	"	"
7	5.0	48	"	"
8	4.0	48	"	"
9	1.0	40	"	"
10	3.0	60	"	"
11	0.5	32	"	"
12	1.0	32	"	"
13	1.5	24	"	"
14	0.5	30	"	"
15	2.0	40	"	"
16	0.5	48	"	"
17	5.0	80	スプリンクラー	電気揚水
18	2.0	60	自然流下式	ジーゼル
19	3.0	80	"	電気揚水
20	3.0	48	"	ジーゼル
21	1.0	25	"	"
22	2.0	25	"	"
23	2.0	40	"	"
24	1.0	32	"	"
25	1.0	40	"	電気揚水
26	2.0	48	"	ジーゼル
27	1.0	48	"	"
28	2.0	60	"	"
29	3.0	48	"	"
30	1.5	32	"	"
31	1.0	40	"	"
32	4.5	80	"	電気揚水
Total	74.0			

(Salgado de São Félix 郡の農業改良普及所 (EMATER) の資料による)

\* 灌漑地点の番号は第 4 図の番号と同じ。



りトマト3ヘクタール、同ピーマン2ヘクタール、冬どりトマト2.5ヘクタールと合計7.5ヘクタールを活用している。冬どりトマトの後は何も栽培しないが、夏どりトマトの後にはトウモロコシ・フェジョン（豆類）を作るといふ。

農業改良普及所（EMATER）は、バルゼア農業に関しては、野菜栽培を中心とした集約的な農業の発展を目的として指導を行っている。灌漑農業の促進については、連邦政府によるプロバルゼア（PROVARZEA）があり、ブラジル銀行から融資を受けられるが、われわれの調査時点では、S. S. Félix 地区ではこの計画の恩恵をうけている農家はみられなかった。

## （2）ブレジョス

郡境の南部には、海拔500～550メートルの平坦面が広がる。ボルボレマ山地のブレジョスは一般に海拔800メートル以上であるが、S. S. Félix が南接しているマヌエル・デ・マツス山地では、350～400メートル以上をブレジョスと呼んでいる。この地域の海拔580メートル地点に露出した基盤岩（片麻岩）には、ポットホール状の溶食穴がみられる。この地域から、ゴイアナ川の支流がチンバウバ方面へ流出しており、それに沿って湿潤な気流が流入する（ジャックフルーツの変型樹がみられた）ので、より標高の高いブレジョスと同様、比較的湿潤な気候を呈するとみられる。これは、アネウ・ド・ブレジョス（Anel do Brejos）同様、バナナ、サトウキビ、およびオレンジの栽培によって特徴づけられる。オレンジの種類としては、ラランジャ・バイヤ、ラランジャ・コムン、ラランジャ・リマドーセがみられたほか、レモンも若干栽培されていた（写真5-1）。また本郡唯一のエンジェーニョがカバオ（Cavao）に存在しており、サトウキビはピンガに加工されていると考えられる。

ブレジョスは小農地帯である。このことはオレンジ、バナナの栽培区画が小さいこと、またトウモロコシ・フェジョンに加え、マニオクが比較的多くみられることから理解できる。ブレジョスには、マニオクを製粉するカザ・デ・ファリーニャが、ペルナンブコ州地区を含めて20軒近くあり、各カザ・デ・ファリーニャは近隣の20～30戸の農家によって利用される（写真5-2）。

この製粉小屋の内部には、マニオクのおろし機、圧搾機、乾燥オーブンがセットになっている<sup>44)</sup>。回転するおろし機にはベルトでつながった木製の大きな弾み車が連なっており、水分を含んだ荒挽きしたファリーニャは槽で圧搾機に移される。圧搾機は回転するネジ棒で圧力を強めていく方式で、搾り汁は戸外へ流出するようにできている。さらに湿ったファリーニャを乾燥するオーブン（土釜）は、直径2～3メートルの円形をしており、表面は薄い粘板岩でできており、火の焚口は外についている。釜には、戸内から火加減をみるのぞき窓がある。火力が平均するように、エンシャードで何回も反転しながら乾燥させる。ファリーニャ（マニオク粉）は本来自給的なものであったが、マニオクの栽培が少なくなったので、商品化が進んできている。このことは、ファリーニャが定期露天市（フェイラ）で商品として売買され、またレストランでは、米と豆とともに常にだされることから明らかである。

ブレジョスにおけるマニオクは、7～8月に植えつけられる。低地のカーチンガ（標高100～300メートル）では4～5月に定植されることと比較すると、この地域で雨が多いことがわかる。

農業改良普及所の技術員<sup>45)</sup>によると、小農地帯とはいえ本郡のブレジョスには、8～12ヘクタールの規模の農家が卓越するという。こうした農家には、バナナ、ココヤシ、パパイヤの自給用果物が存



写真5 プレジヨスの農業要素

5-1 オレンジ栽培

サルガド・デ・サン・フェリックス郡南部の海拔 500 メートル前後の高原状のマヌエル・デ・マトス山地では、数種類のオレンジが栽培されている。



5-2 マニオク製粉小屋 (Casa de Falinha)

原始的なカザ・デ・ファリーニャである。左が妻入りの入口であり、釜の焚口が正面に見える。中にはおろし機、圧搾機、オープン・のセットがある。



5-3 プレジヨスの民家

バナナ、森林等はプレジヨスの雨の多さを示している。手前はトウモロコシ・フェジョン、ヤーメ（長いも）の畑で、右手に牛の囲いがみえる。

在し、5頭程度の牛が飼育され、農家を訪問した際、小農地帯とはいっても決して貧しい印象を受けなかった(写真5-3)。

### (3) カーチンガ

バルゼアとブレジョスとの間には、広大なカーチンガ地帯が広がる。このカーチンガは主として牧場に利用されている。牧場には芝のようなパンゴラ・グラス、バッファロー・グラスなどの牧草が栽培されることもあるが、多くは天然牧草である。黄色に花をつける豆科のマタ・パスタ、セナ・ブラバ(カラスノエンドウに類似)がその主なもので、土地がやせると白い花のバッソーラ・ボタンが入る。事実、土壌養分の流出により長石の多い白っぽい土壌の地区には、このバッソーラ・ボタンが一面に生えているのが認められた。

牧場内には、このような草本性ばかりでなく、木本性の植物も生えている。マルメレイロとジュレマがその代表であり、ネムノキに似たジュレマは、ジュアゼイロとともに、樹枝をはり樹冠を作っているので、サバナ草原の感じを与える。ジュレマとジュアゼイロは、牧場界をなすアベロイスとともに、アグレステを特徴づける植物である。このカーチンガ一帯は、マヌエル・デ・マトス山地がペルナンブコ州から吹いてくる季節風の雨かげになるので乾燥する。そのため、放置するとマンダカルー等のサボテン類が侵入し、二次林(カポエイラ)となる。この二次林は、カンピナ・グランデの西方のカーチンガ植生に極めて類似している(写真6-2)ので、住民がカーチンガと呼んでいるのもうなづける。

地元の人々がカーチンガと呼んでいる地域を地形的に細かくみると、海拔130メートル面と100メートル面が存在することがわかる。われわれは前者を「カーチンガ・アルタ」、後者を「カーチンガ・バイシャ」と呼ぶことにした。バルゼアから続く130メートル面は、パライバ川に沿った道路脇に立地するモラドールの家々に近いせいか、トウモロコシ・豆類(milho-feijão,あるいは milho-fava)が卓越するが、100メートル面には牧場が卓越する。牧場地帯とはいっても、山麓部やパライバ川の支流のサルガド川やマリニェイロ川(Riacho Marinheiro)の河川付近では、トウモロコシ、豆、綿花、時にはソルゴー、エレファント・グラスが栽培されているのを認めることができた。われわれが使用した1975年製作の2万5千分の1地形図にも、荒野(Cerr)が卓越する中に、穀物(CI)、マニオク(Mandioca)、バナナ(Banana)、綿花(Algodão)の記号がみられた。とくに、かつてファゼンダ・アラガマやファゼンダ・マリア・デ・メロがあった地域は、サルガド川の上流部に位置し、マルガリーダ山地とサッコ山地(Serra do Sacco)に囲まれた地域であり、前章で述べたように、アラガマ騒動の後に協同組合化したので、小農地帯を形成している。ブレジョスと同様、この地区ではトウモロコシ、フェジョン、マニオクなどの自給用作物が栽培されている。南端のシチオ・ピアカス(Sítio Piacas)では、耕地の区画を示すアベロイスの生垣が山麓線に東西にのびており、小農地帯の景観を示している。さらに、ペルナンブコ州のチンバウバの影響が、ココヤシやサトウキビの栽培に表われているように思われた。

一方、カーチンガ地帯の牧場には、主としてネロール種の牛が放牧されている(写真6-1)。ネロール種は肩にコブがあるゼブ系の白色牛であり、インド起源であるので、熱帯地域の放牧に適する肉用種である。この地帯は、前述のように、大牧場主(ファゼンデイロ)によって経営されるファゼン



写真 6—1 カーチングの放牧

海拔 100 メートル前後の波状平坦面は、前方の山地の雨かげになり、典型的アグレステの放牧景観を呈している。放牧されている牛はゼブ系のネロール種牛である。



写真 6—2 カボエイラ（2次林）

カーチングを放牛するとカボエイラ（2次林）となる。マンダカルーなどのサボテンは、本地域が半乾燥低木有刺林帯（カーチング）であることを示している。

ダが支配的であるが、牧場内を人間は自由に通行することができる。自動車道には、開閉式の馬柵垣の木戸や線路を横にならべたような牛止（間隔橋：マタ・ブーロ）が設置されている。前述のアラガマ農場のようなファゼンデイロとモラドールとの間の衝突をさけるため、ファゼンデイロはモラドールを牧場内におくことを好まない。これらの牧場から追いだされたモラドールは、次章で詳述する、S. S. Félix やカント・アレグレに設置された新農村（アグロヴィラ）に住む農村労働者になったと思われる。

#### IV カント・アレグレの土地所有と農業経営

##### IV—1 農作物と土地利用図

S. S. Félix の中心から西方 2.5km にあるカント・アレグレにおいて、7 月下旬から 8 月上旬にかけて、土地利用状況を徒歩により調査した。調査範囲は南北約 3 km、幅 1.5km である。ここはパライバ川からほぼ直角に耕地が半レグア（約 3km）入っていることに表われているように、パライバ川両側からなる典型的なセズマリアの名残りを留めている地域である。生態的農業地域区分では、バルゼ

アからカーチンガにかかる地域で、パラIBA川の55メートルからカーチンガの138メートルまでの標高差がある。

カント・アレグレは、短冊状の地割にみられるようにミニフンディオ（小農）地帯であるので、小牧場が卓越するとはいえ、トウモロコシ、豆類、パルマ、綿、マニオクなどが混作される。トウモロコシと豆類（フェジョン feijão, ファーバ fava）は、トウモロコシの稈に豆科植物がまきつくので一般に混植される。土地を消耗させる禾本科のトウモロコシと土地を富ます豆科植物の組み合わせは、インディオやブラック・アフリカの人々によっても行われてきた伝統的なすぐれた農法とみることができる。これは Mf (milho + feijão) の記号で示した。しかし、本地域でみられる混作はさらに作物が多く、Mf にパルマ (palma=ウチワサボテン) や綿花 (algodão) やマニオク (mandioca) が加わったものがみられる。これらは、それぞれ Pmf, Amf,  $\textcircled{M}$ mf として示し、パルマ、綿花、マニオクを強調した。これは、トウモロコシ、フェジョン（ファーバを含む）が、最も普遍的な自給作物であるのに対し、パルマ、綿花、マニオクは商品作物であるからである。また、Amf は Mf と同様に、作物の収穫後に牛が放牧されるのに対し、パルマ、マニオクの畑には刈跡放牧が行われないという違いもある（写真7-1, 2）。

このようにして作成したのが、第5図の土地利用図である。それによると、いくつかの地区的特徴が認められる。

まず、集落はパラIBA川に沿う道路およびその道路からほぼ直角に入った地点に分布する。この南に入った地区は、かつて牧場に住んでいたモラドールが囲い込みによって追い払われ、農村労働者になり住みついたアーバン・ロット地区と考えられ、われわれはこれをアグロヴィラとよぶことにする。農家は小牧場主、自作農、農村労働者に分かれる。小牧場主や自作農の家にはテレビが入っているが、農村労働者の家には入っていない。しかし後者にはラジオカセットが入っている段階であった。

道路からパラIBA川の水辺までのバルゼア低地は、エレファント・グラス栽培や家庭菜園に利用されている。アフリカから導入された高茎禾本であるエレファント・グラスは、刈り取っても切株から傍芽更新するので、生産性が高い飼料作物である。しかし、これは河川敷とか湿潤な土壌条件でないと栽培できないので、栽培地域は限定される。家庭菜園（オルタ・デ・キンタウ Horta de Quintal）には、オクラ、キャベツ、綿花、サトウキビなどの農作物と、ココヤシ、パパイヤ、カジャ等の果樹が栽培されている。オクラは、スイカ等の果樹類とともにアフリカの黒人によってもたらされた作物であり、ノルデステの特色を反映したものといえよう。道路から南にもバルゼアと呼ばれる緩斜面が広がる。母岩が露出している所もみられ、旧河床であったことがわかる。ここでは、Mf, Pmf が卓越する。

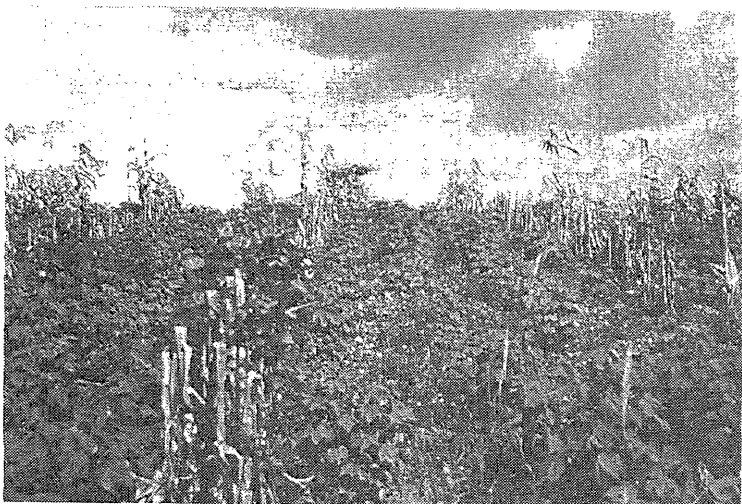
土地利用調査地区にも、水量はわずかではあったが、3本のクリーク（小河流）が入っている。こうした河流は、海拔100メートル前後の面にまでは及んでいない。この河流が刻んだ浅い谷をすぎると130メートル前後の面（カーチンガ・アルタ）があり、ここは、マニオク（ $\textcircled{M}$ ,  $\textcircled{M}$ m）やトウモロコシ・フェジョン（Mf）が卓越する食料作物地帯となっている。この浅い谷の南にある土地がより肥沃であることは、蟻塚の土が赤色をしていることから判断された（写真7-3）。



写真7 カント・アレグレの耕作景

7-1 トウモロコシ・フェジョン(豆類)・パルマの混作 (Pmf)

トウモロコシは、結実後栄養分の吸収をさけるため幹がおられる。そこに、フェジョン、ファーパーなどの豆類が蔓をからませ成長、結実する。これらは一年生作物である。乾季の飼料作物となるパルマ(ウチワサボテン)は永年作物である。



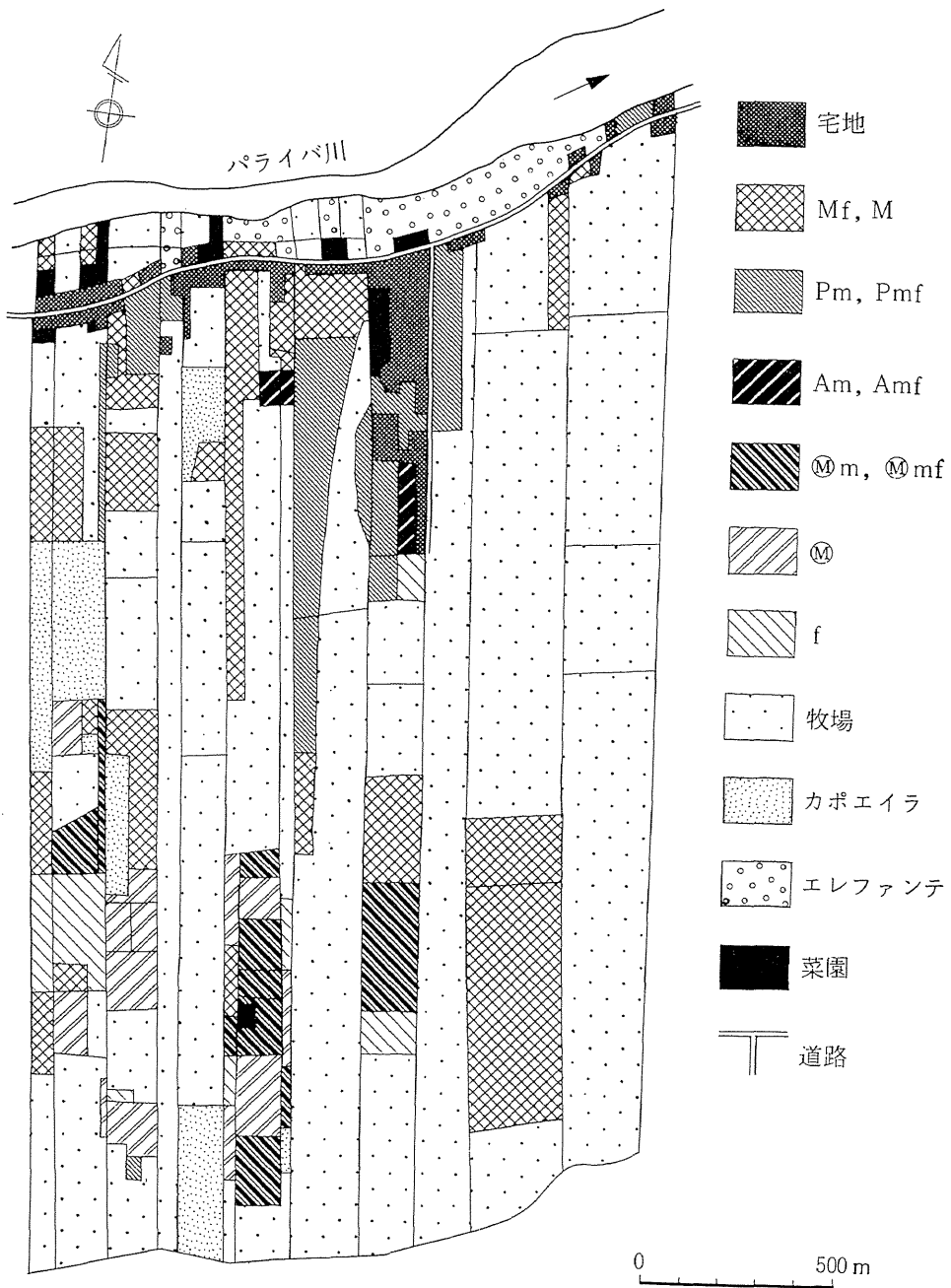
7-2 トウモロコシ・フェジョン・綿花の混作

1984年は雨の多い年であったので、トウモロコシ、フェジョン、綿花の混作畑(Amf)に雑草がはびこっている。この畑には、各作物の収穫後、家畜が放牧される。刈跡放牧の慣行は、本地域だけでなく、ノルデステで広く実施されている。



7-3 マニオクの栽培景

カント・アレグレでは、マニオクは比較的土壌の肥沃なカーチンガ・アルタ(赤色系土壌からなる)で栽培されている。本地域にもカザ・デ・ファリーニャが一軒ある。



M, m (トウモロコシ), P (パルマ), A (綿花)

Ⓜ (マニオク), f (豆類)

第5図 カント・アレグレの土地利用



各所有地は南北に細長い長方形状をしており、パライバ川から南端部まで3キロの長さをもつ農場も一般的である。所有界は、繁茂したアベロイスと有刺鉄線を組み合わせた生垣により、南北方向に整然と走っている。アベロイスは、年に一度、9月から12月の時期に刈られ、また有刺鉄線は強く張られており、ともに管理が行きとどいている。土地所有者は、一般にその土地の東側のフェンスを管理する責任を負っている。

#### IV-2 土地所有と農業経営

##### (1) 小牧場（ファゼンダ）

この地区には2人の不在地主がいる。1人はジョアン・ペソアで商売をしている商人フェリックス・ペレイラ（Félix Pereira）で、アグロヴィラの東にある面積120ヘクタールの牧場を所有しており、それは第2図ではDにより示されている。農地の大部分は牧場で200頭の牛を飼っており、それらはネロール種とオランダ（ホルスタイン）種の雑種である。牧場主は週末に農場に来て過すだけで、家畜の世話は1人のバケイロ（牧童）が行っている。

農作物栽培が行われているのは、バルゼアのエレファント・グラス3ヘクタールと、パルマ・トウモロコシ・フェジョン（Pmf）7ヘクタールである。これらの手入れは、必要に応じて農村労働者を日当2,000クルゼイロで雇って行う。また、牧場内にあるカポエイラ14ヘクタールを農村労働者に切開かせ、畑地（ロサード）化している。ファゼンデイロの使用する2ヘクタールをのぞいた12ヘクタールは、これら8家族の労働者たちが3年間耕作することが認められている。こうした土地には、従来は綿を植えたこともあったが、一般にトウモロコシとフェジョン（mf）が栽培され、その収穫後、9月から牛が放牧される。カポエイラは乾季の11月から1月にかけて伐採され、乾季の終りに火入れされ、トラクターを賃借りして整地が行われた後、雨の降りだす2月にトウモロコシ・フェジョンの栽培が始まる。3年の契約期間が過ぎると、その土地は天然の牧場となり、一方、新たに14ヘクタールの区画が選定され、開墾・畑地化が行われる。このように、14ヘクタールがユニットとなり、3年ごとと輪換式土地利用がみられるわけである。耕作を経験した天然牧場は、年月の経過とともにカポエイラ化して行き、とくに木の多く繁った区域はカポエイラン（capoeirão）とよばれる。このほか、入牧停止牧場（pastagem reserva）がある。このように、牧場内はいくつもの区域に分けられ、それぞれが異った景観を呈している。

もうひとりの牧場主であるジョゼ・アルベス（José Alves）は、土地利用図内に間口114メートル、奥行2,800メートルの耕地29ヘクタールと、パライバ川左岸のモジェイロ郡に短冊状農地が2か所（71ヘクタール）の計100ヘクタールを所有している（第2図E参照）。彼はレシフェで商売をしており、週末に家族の住むこの農場にもどってくる。29ヘクタールの農場は1970年に購入し、左岸の土地はその5年後に買ったものである。

70頭の家畜はモラドールによって管理されている。そのうち20頭が乳牛で、彼らは搾乳のために、細長い農場内につけられた牛道を通して夕刻に牛舎にもどされ、翌朝搾乳後、再び牧場に放たれる。牛は1頭当り1日3リットル、年間180日間乳を出す。29ヘクタールの農場のうち、10ヘクタールに



はトウモロコシ・フェジョン (mf) が栽培され、残りは牧場として利用されている。一方、土地利用図には示されていない左岸の農場をみると、46ヘクタールの土地では、トウモロコシ・フェジョン、および綿が15ヘクタールをしめ、残りは天然の牧場であり、バルゼア低地にはエレファント・グラスが栽培されている。25ヘクタールの土地でも、川ぞいにエレファント・グラスのほかパルマ（6ヘクタール）が植えられ、のこりは牧場が占めている。畑として3年間利用された土地は、5～6年休閑される。休閑地は牧場とされるので、日本の牧畑のように畑牧輪換式土地利用がなされているといえよう。

## （2）小農（シチオ）

カント・アレグレ住民のなかで多数を占めるのは小農民である。S. S. Félix 郡における土地所有形態については、第2表ですでにみたとおりであるが、ここでは、それぞれ17ヘクタールと16ヘクタールを所有して比較的大きな小農に属する2軒の農家と、1.5ヘクタールという最小規模に分類される農家についてのべてみたい。

カント・アレグレ生れのドミンゴス・ダ・シルバ (Sebastião Domingos da Silva) (61才) は、5ヘクタールの借地農であったが、1961年にモジェイロ郡側に22ヘクタールを購入して自作農となった。ここには電気も入っておらず、斜面が右岸側よりも急で、バルゼア低地が狭いため地価が低かったので購入しやすかった。しかし、農耕には不向きであったので、1980年に売却して、その2年後に右岸に14ヘクタールの細長い土地を購入した。この新しい土地のバルゼア低地にはエレファント・グラスを植え、道路わきには1ヘクタールのパルマ・トウモロコシ (Pm) を栽培しているが、その他はすべて牧場としている。彼はジェネラル・エレクトリック製の揚水ポンプを1981年に導入し、エレファント・グラスとパルマに乾季の8～2月に、1日3時間灌漑する。乳牛は10頭しか飼育していないが、これから増やす意向である。この14ヘクタールの農地の西方250メートルにはさらに3ヘクタールの土地をもち、彼の家もそこにある（第2図のF）。彼は結婚以来11人の子供をもうけたが、9人は死亡しており、長男は結婚して自立したが二男はまだ独身である。従って、14ヘクタールの農場にある家は現在は空家となっているが、将来二男が結婚したら入居する予定であるという。このように、ドミンゴス・ダ・シルバは比較的大きな小農といえ、上昇指向が認められる。

ベゼーラ・ダ・シルバ (Félix Bezerra da Silva) (52才) の農場は、第2図ではGによって示されており、道路に面した家の前後に2ヘクタール、カーチングに14ヘクタールの計16ヘクタールの広さをもつ。彼は西方のドイス・リアショス (Dois Riachos) 生れであり、旧地主のセベリノ・フェレイラ (Severino Ferreira) が分割したものを購入したものだという。ここではトウモロコシ・フェジョン（2ヘクタール）、マニオク（1ヘクタール）、ピーナツ（1ヘクタール）のほかサツマイモも栽培されている。家畜としては乳牛10頭、馬1頭、山羊5頭と、若干のニワトリを飼っており、家畜用にエレファント・グラス0.5ヘクタール、パルマ2ヘクタールを無灌漑で栽培している。2ヘクタールの所有地内にはため池 (barreiro) があるが、8か月間は水がなく、飲料水を含めてほとんどの水をパライバ川に頼っている。家では女性たちはレース編みをして生計のたしにしている。2日がかかりでつくる34センチ四方のレースは、商人によって1枚300クルゼイロで買われ、つなぎ合わさなてテー

ブルクロス等へと姿をかえる。糸は生産者もちであり、ひとりあたり月3,000クルゼイロの収入が得られるにすぎない。

一方、アグロヴィラの中に、1.5ヘクタールの耕地を所有するレオナルド・ダ・シルバ (Junensen Leonardo da Silva) の家がある。彼は1978年に家を見て、1981年に電気を入れると同時にテレビも購入したという。家に付属する耕地には Pmf が中心に栽培されている。トウモロコシとフェジンは自給用であるが、パルマは家畜の飼料として販売する。豆類にもいくつかの種類があり、彼の場合、フェジン・マッカーサー (マッカーサー・ビーン：オカメアズキ)、フェジン・ガンド (白い丸豆)、ファーバ・ムルチニャ (ササゲ)、ファーバ・プレタ (黒うずら豆)、ボカ・デ・モサ (うずら豆) の5種類を栽培している。これらに加え、畑にはトマト、オクラ、カボチャ、ヒョータン、ゴマ、サツマイモ、オレンジ、カジュエなどの自給用野菜・果樹の栽培が認められた。また年6,000クルゼイロで1ヘクタールの土地を借地し、トウモロコシ・フェジン・マニョク (Mmf) を植えている。

彼は家畜としてはロバを飼育している。数年前まで2頭の牛をもち、牧草のパンゴラ・グラスを植えていたが、旱魃時に処分した。谷底にある0.014ヘクタールの土地にはエレファント・グラスを栽培し、ロバの飼料としている。こうした零細規模では生活がむずかしいので、8月から1月までサトウキビ地帯に出稼に行き、家計を補っている。体調をくずして遠出ができなくなる前には、彼はバイヤ州、ベロオリゾンテ、ブラジリア、リオデジャネイロ、サンパウロで年6か月間働いたという。

### (3) 農村労働者

家のロット (敷地) のみを持ち、農地を所有していない農村労働者も多い (写真8)。フランシスコ・ダ・シルバ (Vicente Francisco da Silva) (75才) は、アグロヴィラに住む35家族の農村労働者のひとりである。彼もその妻も、西方のタボカス生れであり、この地区の旧小地主が分割・造成したアーバン・ロットを、1977年に800クルゼイロで購入した。彼は前述したペレイラ農場で、他の7人の農村労働者とともにカポエイラを伐採することを条件に、3年契約で2ヘクタールを無償で借りて



写真8 アグロビラの民家と家族

かつてファゼンダのモラドール (住込み小作人) であった人達は、ファゼンダを追われ、アグロヴィラ (農業労働者村) に住みついた。

耕作する。トウモロコシ・フェジョンの収穫後、ファゼンデイロの牛が9月から刈跡放牧される。3年をすぎるとその土地は牧場化され、新たなカポエイラが開墾される。この方式は、地主にとっても農村労働者にとっても、共利共生の土地利用形態といえる。

彼は3人の息子と1人の娘とともに住んでいるが、息子達は9月から2月まで、ペルナンプコ州のゴイアナの近くにある製糖工場ウジーナ・サン・ジョゼ (Usina São José) に出稼に行き、法定の最低賃金でサトウキビ刈りをして働く。ただ、出稼といっても、2週間に一度、製糖会社のトラックで1~2日間週末を過しに帰ってくる。このカント・アレグレからは、多数の人々がこうしたサトウキビ地帯に季節出稼として働きに出ている。また、長男はリオデジャネイロに5回にわたって長期出稼に行き、シュラスカリアで働いたことがあるという。

## V む す び

ブラジル北東部パラIBA川中流にあるサルガド・デ・サン・フェリックス郡を対象地域として土地利用調査を実施した。S. S. Félix 郡はブラジル北東部の海岸森林帯 (Zona da Mata) から半乾燥内陸部 (Sertão) へ移る漸移地帯 (Agreste) にあたる。アベロイスの生垣、ジュレマ、ジュアゼイロの木によって特徴づけられるアグレステの典型である S. S. Félix 郡で土地所有と土地利用の関係を調査した結果、以下の諸点が明らかになった。

S. S. Félix 郡を含むイタパイアナ地域は、カピタニア制の時代から海岸部で発達したサトウキビ経済を補完する牧畜地帯であった。しかし、パラIBA川中流で本格的に開発が進められたのは、多くのセズマリアが設置されたからである。本地域のセズマリアは3平方レグアのものが多く、その名残りはパラIBA川をはさんで直角に半レグア (3 km) のびるアベロイスの耕地界にはっきりと認められる。ファゼンデイロ (牧場主) は牛を管理し、モノカルチャーのサトウキビ地帯に食糧を供給するため牧場内にモラドール (住込小作人) を住ませた。その結果、アグレステは牧畜とトウモロコシ・フェジョン (豆類)・マニオクを中心とする食糧生産地帯となった。

ファゼンデイロの死後、土地は均分相続制であるので、牧場は子供達に分割相続される。セズマリアの消滅後も、比較的大きなファゼンダが存続しえたのは、有力な息子が都会にでている兄弟に分けられた土地を買い集めてきたからである。ファゼンダは一般にその牧場に住んでいるモラドールごと相続されるので、ファゼンデイロがサトウキビや綿花等の商品作物を栽培しようとする、小作人との間に土地利用をめぐる衝突が生じる。この問題が昂じたのがアラガマ騒動であり、その結果としての農業協同組合 COOAGRAL の成立である。

本郡は平均雨量 700mm であるが、生態的に大きくパラIBA川河畔のバルゼア、南部にあたり海拔 500m 前後の平坦面が広がり比較的雨量の多いブレジョス、およびその中間地帯にあたるカーチंगाに区分される。バルゼアとブレジョスは小農地帯で食料作物が栽培されるが、カーチंगा、とくに 100~120m 面の低位カーチंगाでは大牧場が卓越する。この大牧場ではゼブ系のネロール種が放牧され、カーチंगा・アルタを含めた小農地帯で飼育される乳牛と対照をなす。また、バルゼアでは、エレファント・グラスをはじめ、トマト・ピーマンなどの揚水灌漑農業が特徴的である。

パライバ川バルゼアからカーチンガまで含まれるカント・アレグレで詳細な土地利用調査を行った結果、小農地帯でも本質的に牧畜社会であることが明らかになった。それは、土地利用で牧場が卓越していること、住民であれば牧場内の通行権を有することによってわかる。さらには、トウモロコシ・フョジョン (Mf)、綿花・トウモロコシ・フェジョン (Amf) などの混作畑が食糧生産地帯の支配的土地利用であるが、そこには必ず家畜の進入を防ぐバラ線垣が張ってある。しかも、これらの作物畑は、パルマやマニオクの植え付けられている畑と異なり、農作物の収穫後、棚がとり払われ家畜が放牧される、いわゆる刈跡放牧が実施される。

牧場主は耕地の輪作体系をとっている。牧場に牧区を設け、放牧区と放牧停止区 (pastagem reserva) を設ける単純なものから、畑牧輪換、耕地—牧場—カポエイラ (二次林休閑) というものまである。比較的規模の大きな不在牧場主は、カポエイラを零細な農業労働者に開墾させ、その代償として3年間農作物を作る権利を与えている。農作物はトウモロコシ・フェジョンであり、ここには刈跡放牧されるので、地主にとっても利点がある。この区画は4年目からは牧場となる。

土地利用と土地所有の関係を調査した結果、農地の流動性が高いことが判明した。それは、比較的新しく土地を買った土地所有者が多いからである。牧場を追われたモラドールは、S. S. Félix やカント・アレグレのはずれのアグロヴィラに住む土地なき農業労働者になったが、その顔は暗くない。それは彼らにも、サトウキビ地帯や大都市への出稼ぎ等により土地を購入して小農や小牧場主となる道が開けていると思われるからである。

本調査は、文部省海外学術研究「ブラジル北東部における土地利用の変遷と生態系の変化」(代表者山本正三)の一環として実施されたものである。本稿の作成にあたり、隊長の山本正三をはじめ、隊員の西沢利栄、平岡マリオ、松本栄次、林一六の各位に御教示賜わった。また、製図は宮坂和人氏に依頼した。記して感謝申し上げる。

#### 注・参考文献

- 1) 山本正三(1975): ブラジル北東部における自然環境と人間活動、とくに土地利用の地域的变化について。地理学評論, 48, 616~627に詳しい。
- 2) K. E. Webb (1974): *The changing face of Northeast Brazil*. Columbia University Press, p. 205.
- 3) Manuel Correia de Andrade (1968): *A terra e o homem no Nordeste*, São Paulo, および D. Johnson による英語訳 (1980): *The land and people of Northeast Brazil*. University of New Mexico, p. 9.
- 4) Centre d'Etudes de Géographie Tropicale (1983): *Géographie et Écologie de la Paraíba [BRE-SIL]*, Vol. II. とくに, Raymond Pébayle et José Oraboïs, "Le bas Agreste," pp. 215~235; Raymond Pébayle et Maria Jesus de Nogueira Aquiar, "Le depression d'Itabaiana et ses bordures," pp. 239~263.
- 5) Mário Lacerda de Melo (1978): *Regionalização agrária do Nordeste*. Recife, p. 225; idem (1980): *Os Agreste*. Recife, p. 553.
- 6) Mário Hiraoka and Shozo Yamamoto (1981): Changing agricultural land use in the Agreste of Northeast Brazil. *Latin American Studies*, 2, 81~124.
- 7) Shozo Yamamoto (1976): On the zonal pa-

- terns of land use in the State of Paraíba. *Tokyo Geography Papers* 20, 63~73.
- 8) Tadashi Machida (1976) : Regional variation in the natural environment of Brazilian North-east. *Tokyo Geography Papers* 20, 75~82. Eiji Matsumoto (1983) : A note on the Tabuleiros in the coastal region of the Brazilian Northeast—A geomorphological approach—. *Latin American Studies*, 6, 1~13.
- 9) Webb, 前掲2) p. 146.
- 10) ノルデステの植民過程については、山田陸男 (1982) : ブラジル北東部の空間占拠と開発過程—農業と牧畜の分離と地域問題の形成—. *ラテンアメリカ研究*, 4, 1~34に詳しい。
- 11) W.B. Greenlee (1943) : The first half century of Brazilian history. *Mid-America*, 25 (2), pp. 109~112; Sabiniano Maia (1976) : *Itabaiana, sua história sua memórias 1500-1975*. João Pessoa, p. 23.
- 12) Costa Porto (1965) : *Estudo sobre o sistema sesmarial*. Recife, Imprensa Universitária; Alberto Passos Guimarães (1981) : *Quatro séculos de latifúndio*. Paz e Terra, São Paulo, 5th ed.
- 13) M. Linhares de Lacerda (1960) : *Tratado das Terras do Brasil*, Vol. 1, Rio de Janeiro, Editôra, Alba, pp. 112~118.
- 14) Andrade, 前掲3) p. 112.
- 15) João de Lyra Tavares (1909) : *Apontamentos para a história territorial de Paraíba*, Edição Fac-similar, Coleção Mossorensense, 1982.
- 16) Maia, 前掲11) pp. 27~29.
- 17) *ibid*, p. 29; Irenêo Joffily (1892) : *Notas sobre a Parahyba*. Rio de Janeiro, p. 31.
- 18) Andrade, 前掲3) pp. 131~132.
- 19) Ministério de Educação e Cultura (1967) : *Atlas histórico e geográfico brasileiro*. Rio de Janeiro, p. 22.
- 20) Tavares, 前掲15); Maia, 前掲11) pp. 34~38.
- 21) Tavares, 前掲15) pp. 127~128. セズマリアの規模は、時代とともに縮小した。前述のマラカイベにみられるように、17世紀には長さ4レグア、幅1レグアが標準であったが、18世紀には3平方レグアが典型的セズマリアとなり、さらに19世紀に入ると、1平方レグアへと減少した。Andrade, 前掲3) p. 77.
- 22) Tavares, 前掲15) pp. 127~128.
- 23) この所有者は José Gomes Bizerra, Capitão Thomaz de Oliveira, Goes Manoel Gouçaves da Cunha であった。 *ibid*, pp. 481~482.
- 24) *ibid*, p. 164, p. 503.
- 25) Maia, 前掲11) p. 34, p. 39.
- 26) *ibid*, pp. 136~137.
- 27) IBGE (1960) : *Enciclopédia dos Municípios Brasileiros*, vol. 17, Rio de Janeiro, p. 335. 黒人奴隷労働力にもとづいたサトウキビ経済と、それより内陸に広がる牧畜経済との境界が、ピラー・イタバイアナ間にあったことは、両地域のその後の人口構成からも察せられる。1950年の人口統計によれば、旧イタバイアナ郡 (今回の S. S. Félix およびモジエイロ郡を含む) では、白人が80.0%、黒人が8.8%であったのに対し、ピラー郡では黒人が23.3%、白人が65.7%であり、黒人人口の比率に著しい差異がみられる。 *idem.*, p. 274, p. 337.
- 28) Maia, 前掲11) pp. 136~137.
- 29) Andrade, 前掲3) p. 74.
- 30) Maia, 前掲11) p. 135.
- 31) Organização MCA. (1983) : *Municípios de Paraíba em números*. João Pessoa.
- 32) IBGE, 前掲27) p. 273.
- 33) Maia, 前掲11) pp. 127~132, 137, 145~150, 57~59.
- 34) I. Joffily (1892) : *Notas sobre a Parahyba*. Rio de Janeiro, p. 179.
- 35) IBGE, 前掲27) p. 273. S. S. Félix の名称は、この地域の開発の歴史を一部反映したものである。この郡の東部では小河川が北流して、S. S. Félix の集落の東でパライバ川に注ぐが、この川の水には塩分が含まれているため、高名な伝道師カエタノ Frei Caetano はこれを「塩辛い川 Riacho Salgado」と呼んだという。これは石灰岩によるもので、今世紀初頭から半世紀余りにわたって、マルガリーダ山地 (Serra da Margarida) から産する石灰岩が、建築用やウジーナ、エンジェーニョ用の石灰の生産に利用された。一方 São Félix の名称は、イタリアからの伝道師が São Félix Cantalice の小さな木製の像をこの地へもちこみ、それが集落の守り神 (padroeiro) になったことに由来するという。Maria dos Aujos de Moraes Neves (u.d.) : *Você conhecendo a sua cidade Salgado de São Félix*, Salgado de São Félix, p. 25, p. 28, pp. 32~33.

- 36) Hilton C. Motta ed., *Enciclopédia dos Municípios paraibanos*. Campina Grande, Ed. Grafset, pp. 290~291.
- 37) Neves, 前掲35) pp. 57~60.
- 38) Maia, 前掲11) p. 68, 83~85.
- 39) Neves, 前掲35) pp. 46~47; Barbosa Cantelice (1980) : Alagamar, penetração do capitalismo no campo, um estudo de caso, *Cadernos do CEAS*, **65**, pp. 39~41.
- 40) *O Norte*, 4 Jan. 1980.
- 41) Cantelice, 前掲39) p. 43; Neves, 前掲35) p. 47.
- 42) EMBRAPA-EMATER (1984) : *Programa de Erradicação do bico do Algodoeiro*. Brasília.
- 43) Neves, 前掲35) p. 18.
- 44) Shozo Yamamoto (1973) : A preliminary survey on the alimentation in the Northeast, Brazil. *Tokyo Geography Papers*, **17**, pp. 111~126.
- 35) お世話になったEMATERのRoberto Gonçalves Pina 氏による.

## Agriculture and Land Tenure of the Salgado de São Félix in the Agreste of Paraíba, Brazil

Isao SAITO, Noritaka YAGASAKI,  
Eduardo PAZERA and Keith MULLAR

The município of Salgado de São Félix, our study area located along the middle reaches of the Paraíba River in the Brazilian Northeast, belongs to the transitional zone called *Agreste* between the coastal region (*Zona da Mata*) and the semiarid backcountry (*Sertão*). The land tenure and land use in this typical rural Agreste, characterized by aveloz headges, julema and juazeiro, are carefully examined by our field observation. Our findings are summarized as follows.

Since the early stages of the Portuguese colonization of the Northeast, the Agreste developed as a livestock raising region, which supplemented the sugar economy on the coast. The actual colonization and settlement of the Agreste along the middle courses of the Paraíba River began to take place when land was subdivided and granted as *sesmarias*. Most of the *sesmarias* held in this region had an area of three square léguas, in which the tradition of large landholding originated. *Fazendeiros* managed large extensive *fazendas*, where *moradores* lived to grow subsistence crops such as maize, beans and manioc. The Agreste thus emerged as a cattle region as well as a staple food producer.

Although large properties have been equally subdivided and inherited upon the death of *fazendeiros*, the tradition of large landholdings has survived because subdivided land was bought up and once again accumulated. *Fazendas* have generally been inherited with *moradores* living on the property. When *fazendeiros* intend to intensify the operation by growing such commercial crops as cotton and sugar cane, conflicts inevitably grow between *fazendeiros* and *moradores*. Such a dispute took place in our study area in Alagamar, which ended in the organization of an agricultural cooperative (COOAGRAL).

The município of Salgado de São Félix, where the average annual rainfall is about 700 mm, has three ecological zones including the *varzea* along the Paraíba River, the *brejos* in the southern part at higher elevations with more rainfalls, and the *caatinga* located between *varzea* and *brejos*. The *varzea* and *brejos* constitute the peasant farming districts where food crops

are mainly produced, while the caatinga, particularly lower caatinga, is predominated by large cattle ranches. Zebu-Nelore cattle are mainly raised in such large ranches, while in clear contrast, the milking cows are kept in the peasant region including higher caatinga. The varzea is also characterized by irrigation farming of elephant grass, tomatoes and bell peppers.

A detailed land use survey was conducted in the Canto Alegre district which extends from the Paraíba River varzea to the caatinga. It became clear that the region is fundamentally a livestock country, though it apparently has a peasant farming landscape. This is exemplified by the predominance of pasture in the entire land use where locals possess the right of passing. Food producing plots are characterized by the mixed planting of maize-beans and cotton-maize-beans, which are protected by barbed wire from the entrance of cattle. In these plots grazing in stubble is generally practiced after the harvest, while cattle never enter the plots planted with manioc and palma.

A rotation system is practiced in fazendas by dividing them into pasture sections. Some of them have simply pasture sections and fallow sections. Others have a pasture-field rotation in which land use proceeds from crop field, pasture, to capoeira (secondary growth). Absentee landlords of relatively large fazendas let agricultural laborers clear the forest in exchange for their right to cultivate for three years. Maize and beans are usually grown in such fields, where fazendeiro's cattle are grazed after the harvest. When the contract period of three years expires, such a field returns to pasture, and an other section is chosen and cleared to repeat the same process.

A careful examination of land use and land tenure reveals the high mobility of farmland. Many of the farmers interviewed have recently purchased their land. Moradores who left fazendas to settle in agrovillas at the end of the settlements are landless laborers, but they are not denied becoming landholders by temporarily working in the sugar districts and large cities to the south.